

障害者入所施設における職員の家事負担に関する研究

A study on the housework burden of staff at nursing homes
for severely intellectually disabled people

住居学科 正田 小百合 佐藤 克志
Dept. of Housing and Architecture Sayuri SHODA Katsushi SATOH

抄 録 入所施設で生活している重度知的障害者の高齢化にともなう、施設での家事労働作業が増え、生活支援員に負担がかかっていることが想定される。埼玉県と千葉県障害者入所施設職員の家事領域業務についてアンケート調査を行ったところ、ユニット型施設職員に家事労働の負担を感じる人が多く、特にユニット内に家庭用洗濯機のみしかない施設の職員は入職前に想像した家事量よりも実際の量が多いと感じていることが分かった。

キーワード：入所施設，知的障害，排泄，ユニット型施設，生活支援員

Abstract With the aging of severely intellectually disabled people who live in nursing homes, it is considered that healthcare assistants face more burden because they have more housework to do. After conducting a survey of housework duties of healthcare assistants working at nursing homes for severely intellectually disabled people in Saitama and Chiba Prefectures, we found that the staff at group care unit facilities feel more burden from housework particularly staff who work at the facilities using home-use washing machines, instead of business-use washing machines, feel more burden than they expected before starting work.

Keywords: Nursing Homes, Intellectual Disability, Excretion, Group Care Unit, Health Care Assistant

1. 研究の背景・目的

平成 29 年度の全国知的障害児・者施設・事業調査報告¹⁾によると、知的障害関係事業所の利用者の 60 歳以上の占める割合は僅かずつ増加している。特に 65 歳以上の利用者は全体で前年度より 1,079 人多い 15,730 人で、そのうち 76.9% の 12,102 人が施設入所支援を利用しているとされている。また、施設入所支援利用者において医療的ケアを受けている 2,393 人のうち「排便」が 403 人 (16.8%) となっており、排泄に関する問題が多いことがうかがえる。

近年の入所施設においては従来の集団ケアからユニットケアへ移行するケースもみられているが、高齢期に向かう利用者に対応するにあたりケア単位の小規模化による職員配置や労働量の多さが課題となっていくことが懸念される。高齢者介護施設については、ユニットケアにおけるハードとソフトの技術

的補完性の必要を論じた高橋の研究²⁾や、従来型施設に比べユニット型施設の入浴介助量は減るが掃除・洗濯・ゴミ出しなどの日常生活支援の容量は多くなることを論じている壬生の研究³⁾、認知症高齢者グループホームにおける頓服薬では便秘時に使用するものが最も多く、回答者を得られた合計 29 ユニット 234 人の入居者のうち 97 人 (69.3%) に使われていたことを明らかにした石井らの研究⁴⁾、従来型施設よりもユニット型施設のほうが職員離職率は高いことを示した柏原の研究⁵⁾がある。これらは高齢者介護施設に関する研究であるが、高齢化の進む知的障害者入所施設についても同様の課題があると考えられる。独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園の出版物『高齢知的障害者支援のスタンダードをめざして』の中で、心身の老化傾向は一般的に知的障害の程度の重い人のほうが顕著に表れるとする記述があり⁶⁾、地域移行が進みつつあ

る状況の中で入所施設に残らざるを得ない人たちの高齢化が進み、現場での対応に苦慮があることが懸念される。

そこで本研究では、特に重度の人たちが利用している知的障害者入所施設の生活支援員に対し、洗濯、配膳、清掃等の家事的業務の実態についてアンケート調査を行い、入所利用者の介助を行う印象が強い生活支援担当の施設職員が行っている家事的業務の実態を明らかにし、その負担感について考察する。

2. 調査概要と回答者属性

埼玉県と千葉県で知的障害者の入所支援を行う132施設に各施設5名分のアンケート用紙を郵送し、60施設 215人分の回答を得た。調査概要をTable1に示す。

記入のあった回答者の性別は男性が87人(49.4%)、女性が89人(50.6%)でほぼ同数であった。年代は20代が74人(34.4%)、30代が57人(26.5%)、40代が53人(24.7%)、50代が21人(9.8%)、60代が4人(1.9%)で、その勤続年数は10年以上が53人(29.5%)、6年から10年が52人(29.2%)、3年から5年が48人(27%)であった。すなわち、本調査結果は男性・女性を問わず、勤務歴の長い人たちの意見・意識に基づくものであると言える。

なおこのうちユニット型の建物がある施設は施設HPや回答から得た情報から9施設(回答者31人)と判断した。また、選択肢の中に『ユニット』という言葉を用いて調査を行ったが、ユニット型でない施設でも自分の施設のフロア等に置き換えて回答した場合、自分の施設はユニットではないということで回答を見送っている場合の両方のケースがみられた。今回は該当部分については設問の趣旨に影響がないと判断し、そのまま集計した。

Table.1 調査概要

調査期間	2018年7月19日～8月31日
調査対象	埼玉県・千葉県内で主に重度知的障害者の入所支援を行っている施設の生活支援員
調査方法	郵送にてアンケート依頼、返信用封筒にて郵便回収。132施設660人に依頼、60施設215人から返却。施設回収率45.4%、職員回収率32.5%。
調査項目	洗濯行為・食事の支度・清掃や収納の各項目ごとの作業担当者および作業方法、家事量の多さについて、回答者属性(年代、性別、勤続年数、他施設での経験の有無等)。

3. 調査結果

3-1. 洗濯について

入所利用者の使用した衣類・寝具の洗濯を行うのは誰が行うか尋ねたところ、ほとんどの施設において生活支援員が行っているという回答が得られた(Fig.1)。

ただし施設によっては「利用者自身が行う」「職員と利用者が一緒に行う」「部分的にリース」「平日は専門職員、休日は生活支援員」という回答もあった。「洗濯はすべて外部の業者」という回答が2施設、また「利用者の仕事として行っている」というところもあり、施設や利用者の状況によりその取組はさまざまであることがわかった。

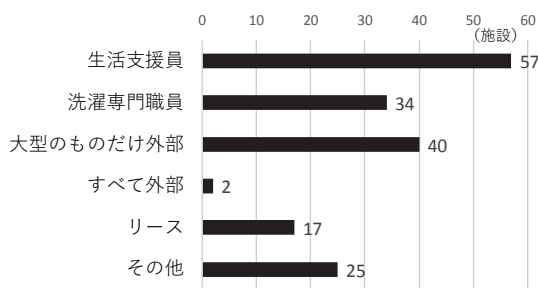


Fig.1 洗濯を行う人(複数回答・単位:施設N=60)

施設内で使用している洗濯機やその場所についての設問(Fig.2)では、「リネン室に集める」が最も多く53施設(88.3%)、「ユニット毎に家庭用の洗濯機がある」という回答が40施設(66.7%)、「ユニット毎に大型洗濯機がある」という回答が23施設(38.3%)であった。この場合のユニットとは、回答の状況からしてユニット型だけでなく、フロアという意味で回答していた人もいるものと思われる。その他の中には「実習棟に大型洗濯機がある」「下着は家庭用で洗っている」「汚物専用の洗濯機がある」「共有の場所に両方ある」など、施設によって事情が異なることがうかがえた。なお、このうち「ユニット内には家庭用しかない」と回答のあったのは24施設(40%)であった。

洗濯に関連した仕事で大変だと思うことについて尋ねたところ、「漏便のついた汚れ物の洗濯」が最も多く153人(71.2%)、次いで「洗濯物を各利用者のタンスに入れる」が66人(30.7%)、「洗濯物のたたみ」が62人(28.8%)であった(Fig.3)。

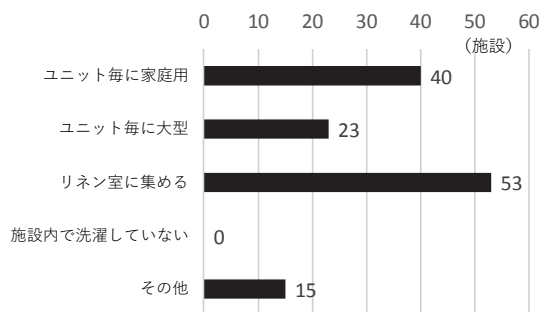


Fig.2 洗濯機の大きさや洗濯の場所
(複数回答・単位：施設/N=60)

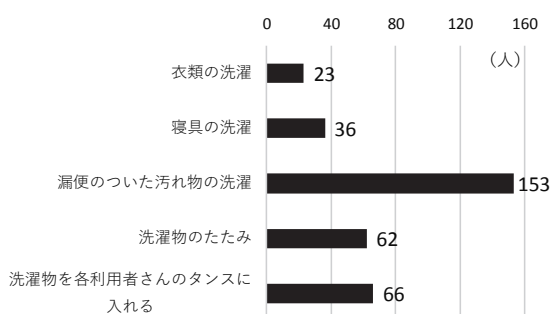


Fig.3 洗濯で大変に感じる事
(複数回答・単位：人/N=215)

利用者の衣類やリネン類の収納に関して使いにくさや衛生・安全上の課題、または工夫していることを尋ねた結果を Fig.4 にまとめた。

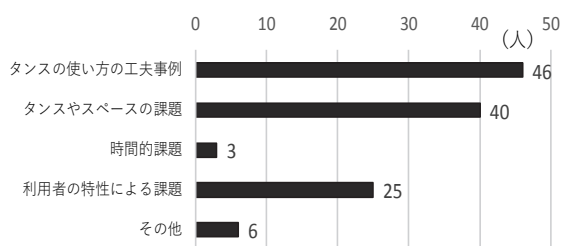


Fig.4 収納の課題と工夫 (自由回答・複数回答あり)

「タンスにシールや写真を貼る」「定期的にタンスの整理をする」「鍵をかける」などタンスの使い方の工夫を書いた人が 46 人いた。同じ服ばかりを着る、破く、いじって中をぐちゃぐちゃにしてしまう等の衣類へのこだわりのある利用者への対応として鍵を用いることはやむを得ない現場の苦慮が感

じ取れた。また課題として、「木製のタンスが老朽化により開けづらくなっている」「衣類が入りきらない」等のタンスそのものの意見を挙げている人もみられた

洗濯物のたたみについては、Fig.5 でみられるように、「利用者と一緒に」に行っている施設が 54 施設 (90%) であった。その他の具体的な回答には「洗濯パート」「就労の一環で利用者」「土日のみ利用者本人」「ボランティア」とあった。

基本的には生活支援員が行っており、忙しい中での作業に負担を感じる人もいることがうかがえる。

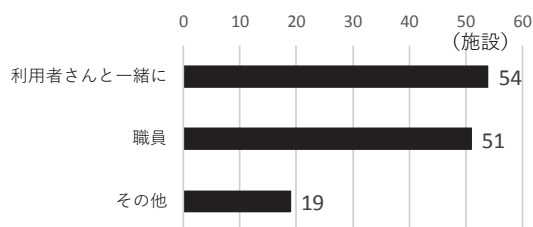


Fig.5 洗濯物のたたみを行う人
(複数回答・単位：施設/N=60)

尿や便失禁の衣類や寝具の洗濯について困ることを聞いたところ、「配置職員が少ない時に洗濯の必要があること」が 118 人 (54.9%)、「出来れば洗わずに捨ててしまいたいほどなかなか便が取れないこと」が 77 人 (35.8%)、「ハイターなどに浸けて衣類が変色してしまうこと」が 58 人 (27%)、「汚れた物をハイターなどに浸けておく場合に適切な場所がないこと」が 29 人 (13.5%)、「シーツなどの大型寝具を洗う場所がないこと」が 25 人 (11.6%) であった (Fig. 6)。

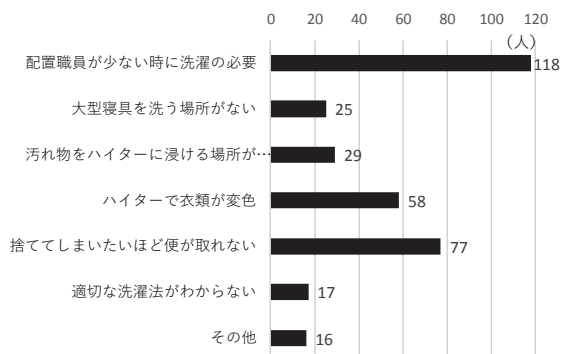


Fig.6 洗濯で困る事 (複数回答・単位：人/N=215)

このことから、重度の知的障害者支援施設では尿失禁・便失禁（漏便）への対応が職員の家事的業務に負担感を与えていることがわかる。特に3割前後の人が便の付着やハイター等の扱いについて苦慮しており、既往研究でもみられていたように高齢化や薬の副作用によって便秘になりがちな人に対する下剤の投与により便が液状になり、付着しても落とすづらい状況がうかがえる。

衣類やシーツの乾燥方法について Fig. 7 に回答をまとめている。57 施設（95%）の施設に業務用の乾燥機があるが、家庭用乾燥機と併用しているところも 26 施設（43.3%）あった。また、「物干し場など外に干す」とするところも 45 施設（75%）ある一方で、「利用者個人の居室」という回答も 26 施設（43.3%）あった。

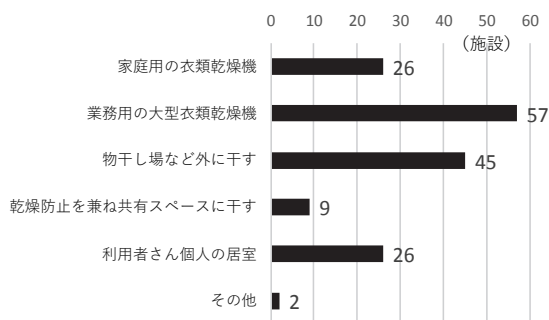


Fig.7 衣類やシーツの乾燥方法（単位：施設/N=60）

洗濯行為で負担に感じていることを自由回答で記入してもらったことを Fig.8 にまとめた。

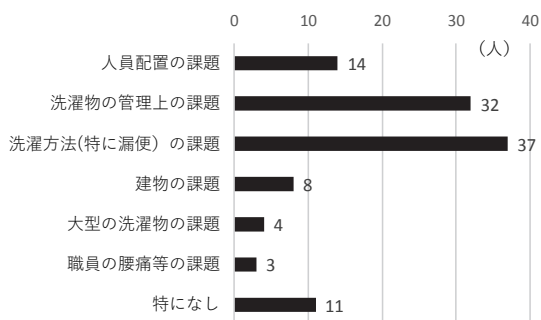


Fig.8 洗濯行為の負担（単位：人/N=215）

分類別にまとめると、一番多かったのは洗濯方法に関する課題（37人（17.2%））で、そのうち「便等

の汚れの洗いにくさや臭い」「職員による洗濯方法の違い」「適切な洗濯方法がわからない」「乾燥機を利用することによる衣類の傷み」といった洗い方の課題を挙げた人が24人（11.7%）、「洗濯機・乾燥機の使いにくさ」「洗濯機のメンテナンス頻度の多さ」「冬場の水温の低さによる洗濯のしにくさ」等の設備的な課題を挙げた人が13人（6%）だった。

次に多かったのは洗濯物の管理上に関する課題で、その中では「洗濯物が多い」「所有者の仕分けが大変」等の意見が29人（13.5%）であった。自分の衣類を管理できない人が多いため洗った後の仕分けが大変になったり、記名していても洗濯の回数を重ねると名前が消えてしまうためとみられ、紛失を懸念する意見もあった。

続いて「たたむ時間がない」「人がいない」などの人員配置の課題を挙げた人が14人（6.5%）、「乾燥機のある場所が暑い」「洗濯スペースが狭い」等の建物の課題を挙げた人が8人（3.7%）になった。自由記述だったこともありこの設問で回答を記入した人は少なかったが、負担が大きい状況である記述がみられた。その理由の1つとして、浸け置きなどの必要がある失禁衣類の取り扱いのための十分な作業スペースが確保できないことが推察される。

3-2. 清掃や整理を行う人

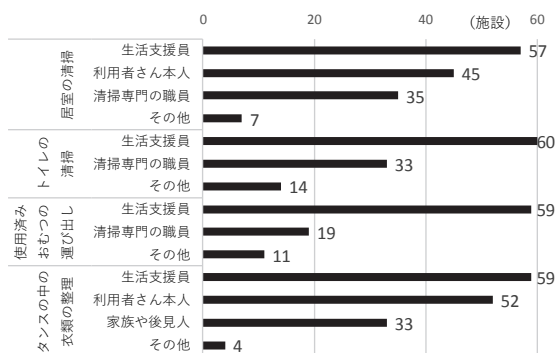


Fig.9 清掃等の作業を行う人（単位：施設/N=60）

清掃等について、誰がその作業を行うのかを Fig.9 にまとめた。複数回答可で聞いているが、ほぼすべての施設で生活支援員が「居室やトイレの掃除」「使用済みおむつの運び出し」「利用者のタンスの中の整理」を行っていることがわかった。

3-3. 建物の造りと家事負担

「建物の造りが違っていればもう少し家事の負担が減るのではと思うことがあるか」という設問（自由回答）では、洗濯スペースに関することを回答した人が一番多かった（Fig.10）。具体的には、居住棟と洗濯室や食堂等が離れている・浴室と洗濯室が離れている（9件）、狭い・たたむための場所がない（7件）、洗濯機・乾燥機のある場所の温度管理ができない・冬場の水温の課題（3件）などが挙げられていた。

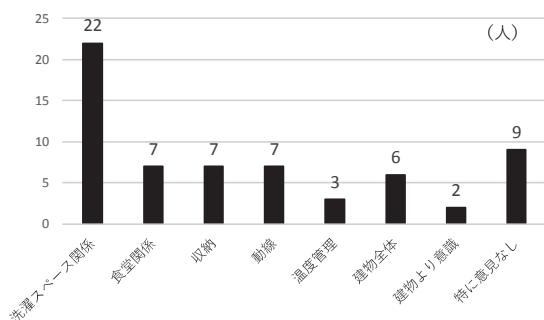


Fig.10 家事負担が減ると思う建物の造り
(単位：人/自由回答)

3-4. 備品の管理方法

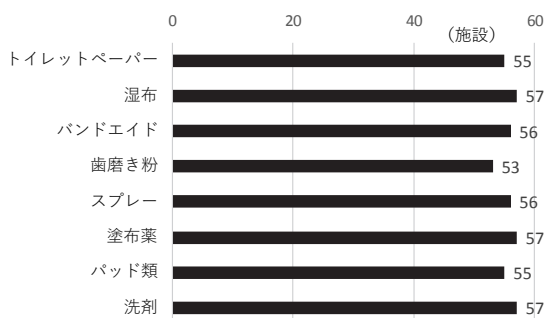


Fig.11 鍵のかかるところで管理する備品
(単位：施設/N=60)

日用衛生雑貨を鍵のかかる場所で保管しているかの問いには9割以上の施設が洗剤や薬剤だけでなくトイレトーパーやナプキン・パッドなどのトイレまわりの日用品なども施錠管理していることがわかった（Fig.11）。

Fig.11 にてほとんどの施設で施錠管理していると

いう回答のあったトイレトーパーやリハビリパンツ・パッド（尿取りパッド）類のストック置き場については、「トイレから少し離れた場所」という回答が46施設（76.7%）で一番多かった。（Fig.12）

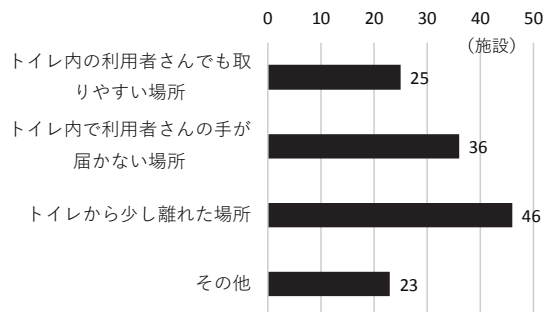


Fig.12 トイレトーパー等のストック置き場
(複数回答 単位：施設/N=60)

ただし、「備品庫」「職員室管理」「利用者さんにより対応が異なる」というコメントもあり、「トイレ内」と「トイレから少し離れた場所」の両方への回答もみられていた。

いずれにせよ、便器内への投げ入れなどの可能性もあるトイレトーパーやリハビリパンツ・パッド類については、多くの施設でストック品の取り扱いに注意していることがうかがえる。交換時などにわざわざ取りに行く時間のロスがあることも予想され、トイレまわりの収納について安全で使いやすいものを検討していく必要があるものと思われる。

ペーパーホルダーについても質問を設けた。半数の施設でペーパーホルダーに鍵のかかるタイプのもを使用していることがわかった。一般的なワンタ

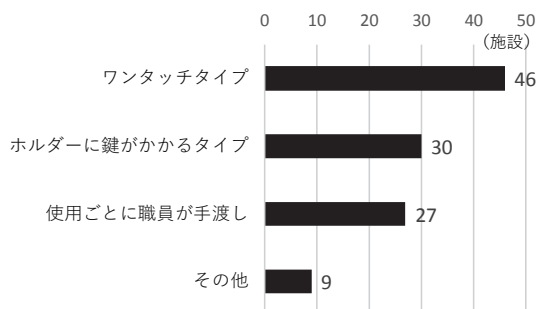


Fig.13 ペーパーホルダーについて
(複数回答 単位：施設/N=60)

ッチタイプのものを使っている施設も多いが、着脱が簡単な反面、ロールごと便器に投げ入れられる等の行動につながりやすいため、「使用ごとに職員が手渡し」という回答も約半数みられた (Fig.13)。その他の中には「ジャンボロールを使っている」「ホルダーを最初から使っていない」という意見も含まれる。また、「ふきとりは職員」という意見がその他には含まれるが、これについては他の回答の中にも職員がそのように対応しているケースがあるものと考えられる。

3-5. 配膳の状況について

食事の配膳の状況については、『厨房からセットされてきたものを配膳し、洗わず返す』が最も多く 52 施設になった (Fig.14)。ただし選択肢の言葉の遣い方に対してさまざまな解釈がなされたとみられ、この中には「ごはん味噌汁は厨房、簡単なおかずはユニットで調理」といった部分的な合致でもこの選択肢を選んだことが考えられる。「配膳は職員、下膳は利用者」「できる利用者には一緒に配膳を手伝っていただいている」というコメントもあり、この選択肢だけではそれぞれの施設の状況が把握しきれいかなかったことが想定される。

また、大きな食堂で食事をしている施設の職員とみられる人のコメントには「The 施設という感じなので、もっと家庭的な雰囲気の中で食事をしてもらいたい」というものもあった。

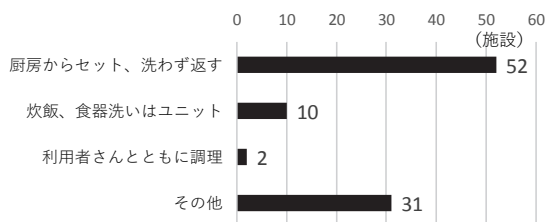


Fig.14 配膳の状況 (単位: 施設/N=60)

ユニット内にある調理器具を尋ねると、電磁調理器とガスコンロが各全体の 3 分の 1 程度の施設にあるが、炊飯器があるのは 28 施設 (46.7%) だった (Fig.15)。このことから、調理は別の場所にある厨房で行い、ユニット内にある電磁調理器やガスコンロでは調理はほとんど行われていないところもあることがうかがえる。

電子レンジがあるのは 34 施設 (56.7%) であった。電子レンジは冷めた食事の温めなおしだけでなく清拭用の温タオルの用意などにも対応できるため、所有している施設が半数を超えるものと思われる。

その反面、「ユニットではないためそうした調理家電はすべて厨房や食堂にある」という回答もあった。

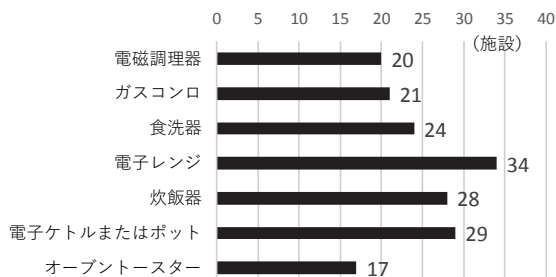


Fig.15 ユニットにある調理器具 (単位: 施設/N=60)

ユニットでご飯を炊く場合のみ「米を研ぐ、ごはんをお茶碗に盛る時の利用者に配慮した計量についてなにかご意見があればお書きください。」という設問を用意したが、これについては「全量計量するので大変」と回答したのは 1 名のみだった。高齢化により糖尿病などの対応でご飯を計量することが多くなるとは思われるが、それでも「炊きたてのごはんのほうがおいしい」「あたたかいごはんを食べていただきたい」とする記述もみられ、この点については負担に感じる人はいなかったと判断できる。

3-6. 家事量についての考え方

入職前に想像した家事の量と比べ、今の施設の家事量はどう感じるかという問いには、回答者全体では「想像通り」と答えた人が最も多くなり 102 人 (47.4%)、次いで「多い」が 86 人 (40%)、「少ない」が 18 人 (8.4%) となった。

この家事量の考え方について回答者の男女差はなく (Table2)、「多い」と回答した人の年齢層は 20 代が 25 人 (35.2%)、30 代と 40 代がそれぞれ 19 人 (26.8%) と、年齢にかかわらず家事量が多いと感じる人はいることがわかった (Fig.16)

しかし家事量についての感じ方を設備の条件別に集計してみると (Fig.17)、『ユニット型施設』と『家庭用の洗濯機のみ使用』のグループでは、家事量「想像より多い」と感じる人の割合が最も多くなる。例えば『ユニット型施設』(31 人) では、「想像通り」

Table 2 入職前に想像した家事量と実際量
(単位：人/N=215)

		入職前に想像していた家事の量と比今の施設の家事量は					合計
		想像通り	多い	少ない	その他	未記入	
性別	男性	43	35	7	1	1	87
	女性	39	38	8	1	3	89
	未記入	20	13	3	3	0	39
合計		102	86	18	5	4	215

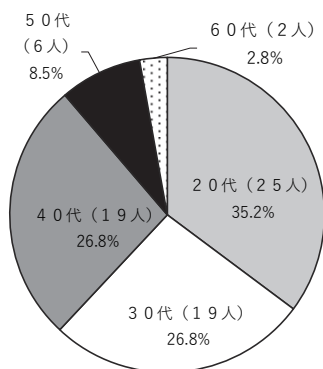


Fig. 16 家事が多いと答えた人の年代 (単位：人/N=71)

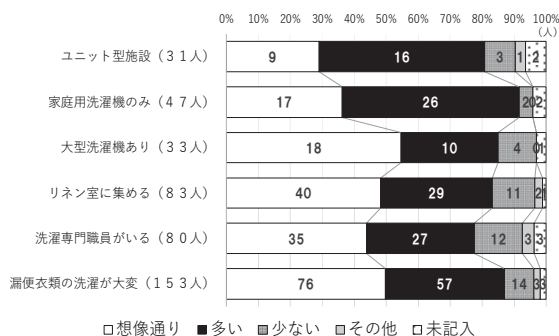


Fig. 17 条件別家事量の感じ方 (単位：人)

が29% (9人) なのに対し「想像より多い」が51.6% (16人) と半数を超えている。また、『家庭用の洗濯機のみ使用』(47人)のグループでも、「想像通り」が36.2% (17人)、「想像より多い」が55.3% (26人)と、半分以上の人は家事量が多いと感じていることがわかった。それらに対して、『洗濯物をリネン室に集める場合』(83人)では、「想像通り」が48.2% (40人)、「想像より多い」が34.9% (29人)で、『大型洗濯機がある』(33人)と回答したグループでは「想像通り」が54.5% (18人)、「想像より多い」が30.3% (10人)であった。

洗濯に関連する仕事では大変と答えた人の数が一番多かった『漏便のついた汚れ物の洗濯』(153人)でも「想像通り」と答えた人の比率が一番高くなり49.7% (76人)、「多い」は37.3% (57人)だった。なお、ユニット型施設の人で大型洗濯機があると答えていたのは3人で、その中で家事が多いと回答していたのは1人のみであった。

すなわち、家事量が多いと感じる要因には、洗濯室が狭いユニット型施設では大型洗濯機が置けず、家事効率が悪くなることが考えられる。このことは、前述の壬生の研究の「ユニット型施設において洗濯などの日常生活支援の仕事量が多くなる」とする調査結果と同様であり、着目すべき点と考える。

生活支援員の仕事としての家事についてどう感じるかという設問に対しては、回答した139人中「家事があるのは当然」と回答した人が71人いたのに対し、何らかの形で職員配置が増えるとよいと考える人が74人と、わずかではあるが職員配置の増加を願う人のほうが多くなり (Fig.18)、その内訳は、「家事専門の職員がいるといい」が19人、「配置職員が増えるといい」が37人、「家事は当然だが配置職員が増えるといい」が8人、「家事職員か配置職員のどちらかが増えるといい」が10人であった。「当然」と回答した人ではスペースの狭さ、意識ややり方の問題であり職員配置の問題ではないとする意見もみられた。さらにコメントの中に「もっと利用者と接したい」という意見があったことは今後の施設計画・施設運営にとって重要な意見だと考えられる。

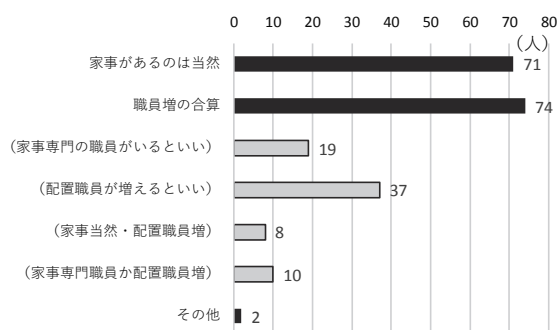


Fig. 18 家事についての考えと職員数に関する意見 (複数回答 単位：人/N=139)

4. まとめ

本研究により得られた、知的障害者入所施設における家事的業務の課題は次の通りと考えられる。

- ・家事的業務における建物の課題は洗濯に関することが多い。
- ・漏便による汚れ物の洗濯に苦慮している。
- ・日用衛生用品は施錠管理している施設が多い。
- ・トイレまわりの「安全で使いやすい収納」の検討が必要
- ・ユニット型施設の職員では家事的業務が多いと感じる率が高くなる。
- ・大型洗濯機がない場合には家事的業務が多いと感じる率が高くなる。

漏便の課題が大きい背景には、入所施設の利用者の高齢化や、もともと入所施設には排泄の自立していない重度の利用者が多く、腸閉塞（イレウス）などの合併症を持ち合わせている人もいる場合には下剤による排便を促すことが増えてしまう。沖津は、障害者施設の利用者に向精神薬の副作用による利用者の便秘・下剤の調整の難しさによる下痢便・便失禁などが多くみられていることから施設内で排便ケアに取り組んだことをまとめている⁷⁾。本調査でも便が付着している洗濯物の課題があきらかになったが、服薬量の多い重度の人たちでは薬の調整が難しく便失禁による洗濯物が多くなることで現場の職員の仕事量が増えることが懸念される。

きょうされんの2017年の調査⁸⁾によれば、障害者支援事業所職員が仕事を続けられない理由として最も多いのは「精神的・体力的に自信がない」（453人中248人・54.7%）であった。具体的にどういふことで自信を喪失するかまではこの調査では書かれていないが、少なくとも便失禁対応は精神的にも体力的にも厳しい業務の1つであり、今回の調査で得られた結果からみられる建築的な課題を解消することによりそうした課題が少しは軽減される可能性が考えられる。

また、知的障害者の入所する施設の場合は備品を施錠管理するなど安全上の配慮も必要になることが

わかった。

精神的・体力的にも大変な上安全上の配慮が必要な環境の中で配置職員が少ないことや家事的業務が負担になっていることも調査から受け止められた。

引き続き、少しでも現場職員にとって負担感の少ない施設の在り方について研究していきたい。

謝辞： 本調査研究にあたりご協力を賜りました埼玉県と千葉県の障害者支援施設のみなさまに深謝申し上げます。

参考文献

- 1) 公益財団法人日本知的障害者福祉協会調査・研究委員会：平成29年度全国知的障害児・者施設・事業実態調査報告，42-43（2018）
- 2) 高橋誠一：高齢者施設におけるユニットケアの運営に関する研究，厚生科学研究費補助金（21世紀型医療開拓推進研究事業），平成13年度総括研究報告書『痴呆症高齢者のグループホーム及びケアユニット等における有効・効率的なケアのあり方に関する研究』（主任研究者加藤伸司）分担研究報告書，88（2002）
- 3) 壬生尚美：特別養護老人ホームにおける施設形態に関する実証実験—入居者及び介護職員の行動調査からの検討—，関西福祉科学大学紀要，17，74（2013）
- 4) 石井美紀代・吉原悦子・水原美地：認知症高齢者グループホームにおける頓服薬処方現状と与薬時の不安について，西南女学院大学紀要，15，17（2011）
- 5) 柏原正尚：特別養護老人ホームにおける介護職員の離職と職場環境に関する一考察，日本福祉大学健康科学論集，16，21（2013）
- 6) 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園：高齢知的障害者支援のスタンダードをめざして，8（2015）
- 7) 沖津悦子：「排便ケア」への取り組みが利用者も職員も変えた，COMMUNITY CARE 2018-11臨時増刊号，20 No.13 通巻261，057-063（2018）
- 8) きょうされん：障害者支援事業所職員労働実態調査報告，5（2017）